亜急性硬化性全脳炎の疫学調査

研究分担者：東京大学医学部小児科　岡　明

亜急性硬化性全脳炎　全国サーベイランス調査

目的：本疾患の新規患者の発生状況の把握
本疾患の現状での臨床経過
治療法の選択との関連

サーベイランス2012

一次調査
小児神経医療機関709施設
神経内科医療機関761施設
891回答　回収率　60.6%

把握された患者数　88名
2007年の全国サーベイランス調査以降の発症者　15名

二次調査

- 二次調査協力　33/64施設（回収率51.5%）
- 40症例について詳細な情報を記載

- 発症年齢　2歳6か月～22歳4か月
- 調査時年齢　13歳～49歳（平均26.9歳）
- 病気分類　JabbourⅣ期19例，Ⅴ期15例
  85%が進行した症状例
- 多様な医療的ケアが必要　31例(78%)

我が国では麻疹対策は効果を挙げているが亜急性硬化性全脳炎は依然として新規患者が発生している。
今回の調査では患者は長期の罹患期間を経ており、病状も重症化している実態が明らかになった。

研究施設 東京大学医学部、杏林大学医学部、福島県立医科大学小児科、岡山大学大学院発達神経病態学、熊本大学医学部発達小児科、静岡県立こども病院神経科、大阪府立母子保健総合医療センター小児神経科、石巻赤十字病院

解　説

1. 我が国は厚生行政として麻疹の撲滅に取り組んでいるが、今後も麻疹感染後に発症する亜急性硬化性全脳炎の発生のリスクは持続している。

2. 平成24年に本疾患のサーベイランス調査全国の小児科小児神経科医療機関ならびに神経内科医療機関を対象にサーベイランス調査を行い、亜急性硬化性全脳炎は依然として新規発症例があり、また患者は長期の罹病期間で重症化している実態が秋からとなった。